



杉原幸子

六千人の命のビザ

ひとりの日本人外交官が
ユダヤ人を救った



六千人の命のビザ

杉原幸子

杉原幸子 (Yukiko Sugihara)

1913 年生まれ (岩手県)

著書『歌集 白夜』

藤沢市民短歌会会長、湘南朝日新聞歌壇

選者、神奈川県歌人会委員、短歌同人誌

『層』同人・編集委員

現住所／〒 248 鎌倉市津 1069-134

六千人の命のビザ

—ひとりの日本人外交官がユダヤ人を救った—

一九九〇年六月三〇日 初版発行

著者 杉原幸子

発行人 広橋敏栄

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 株式会社朝日ソノラマ

〒104 東京都中央区銀座四ノ二ノ六第二朝日ビル

電話 〇三―五六三―六〇二一 (代表)

振替 東京二―四〇三―一

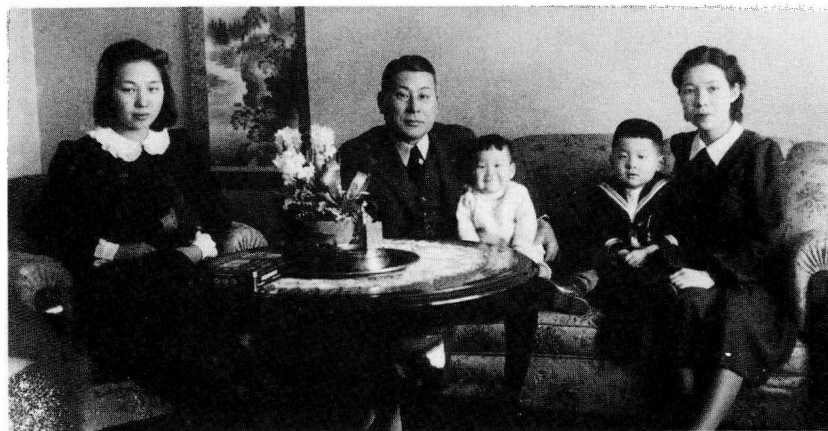
定価 一三〇〇円 (本体一二六二円)



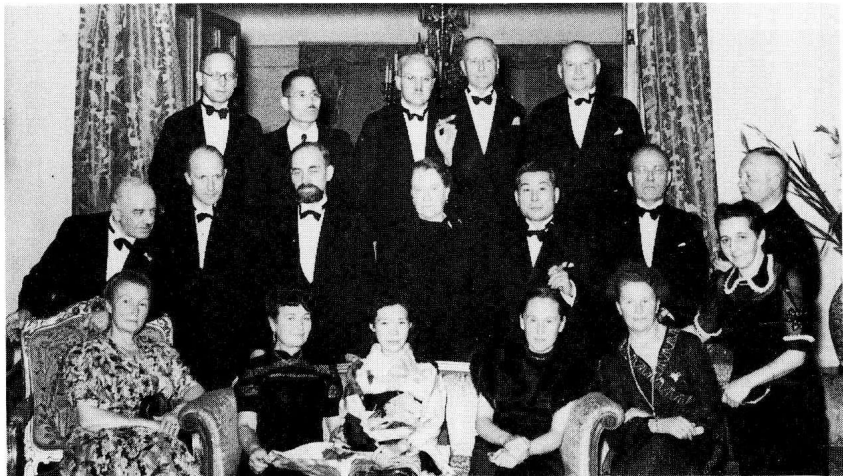
《上》一九四〇年七月末、リトアニアの日本領事館は、突然何百人という大群衆に取り囲まれた。それはポーランドから夜を日に継いで逃がれてきたユダヤ人の群れだった
 《左》当時のカウナス風景



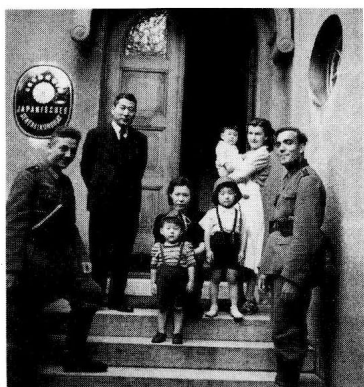
《左》カウナス日本領事館正面入り口 一階が家族の部屋が並ぶフロアで、半地下の階下が領事館の事務室になっていた(左が著者)
《下》カウナス赴任当時の家族 左は妹



《左》ケーニヒスベルグで五月五日の子供の日、鯉幟をあげて近所の子供や母親を招待したところ、たいへん珍しがられ新聞でも報道された

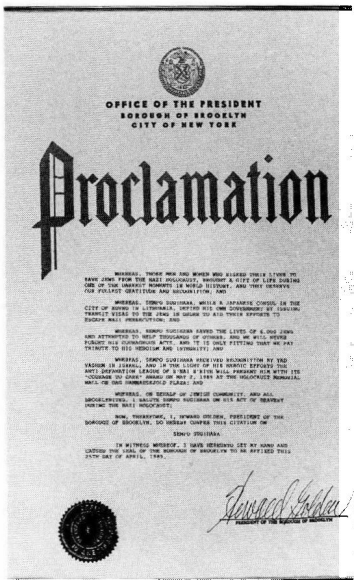


《上》一九四一年、ケーニヒスベルグに総領事館を開設し、総領事として赴任した。その当時のパーティーの記念写真と《右》家族と使用人一同
《下》総領事館玄関でドイツ兵と

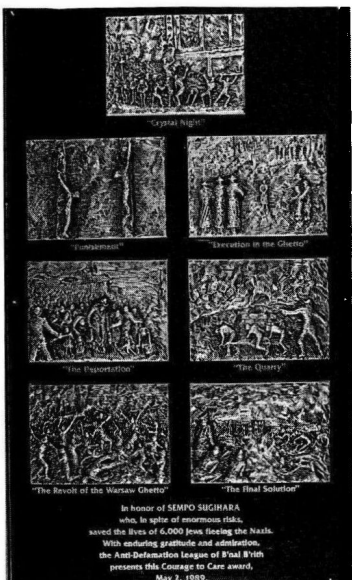


《左》一九四〇年、ベルリンで 後方のブランデンブルグ門は、二年後ブカレストへ向かう途上車で通ったときには、空襲で破壊されていた

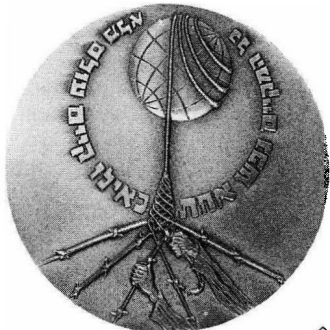
一九八九年四月、ニューヨークのユダヤ人擁護団体の招きで渡米、このとき贈られた表彰状



記念の楯、勇者に与える賞、も贈られる



一九八五年一月、イスラエル政府から夫に授与された「諸国民の中の正義の人賞(ヤド・バシエム賞)」

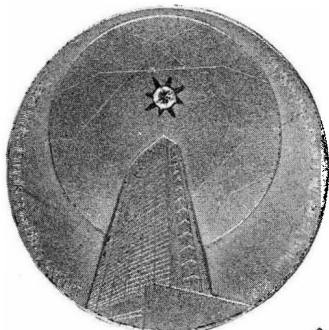


〈表〉

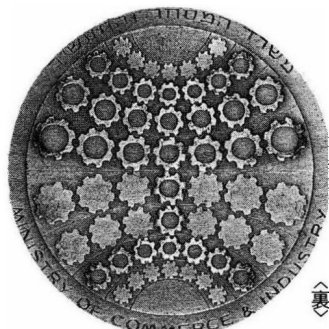


〈裏〉

一九七四年、イスラエル政府より贈られたメダル、ダイヤモンドが嵌め込まれている



〈表〉



〈裏〉

序にかえて

『杉原さんの話を映画にしたい。アメリカに來られる機会はありませんか……』

そんなお話がハリウッドから飛び込んできたのは、一九八八年の暮れのこと。当時の詳しい経過を私に話してほしいというのです。私はそれまで書きかけていた私たち家族の経験した話を完成しなければならなくなりました。もう五十年前の話です。とにかく、四年前に亡くなった夫が、死の直前まで書き残した手記を整理しながら、記憶をたどってみることにしました。

「それは例年バルト海沿いの北欧諸国では珍しくない季節の早い、夏も終わりのようなどんよりした日であった。忘れもしない一九四〇年七月末の日と思う。

六時少し前、表通りに面した領事館の門前が突然人の喧しい話し声で騒がしくなり、意味の分からぬわめき声が高まった。人数が増えるためか次第にその声は激しくなつてゆく。私は急いでカーテンの隙間から外を窺った。何とそれは、大部分が乱れた服装をした老若男女の群れで、色々の人相の人々がざつと、百人近くも領事館の鉄柵に寄り、争つてこちらに向かつて何かを訴えている光景が目映つた」(夫・杉原千畝の手記より)

私の脳裏に、あの朝の光景がはつきりとよみがえつてきました。リトアニアの日本領事館を取り

囲んだ何百人という人の群れ。疲れた様子で立ち尽くしながら、館内をのぞき込む目には、もう後には引けないという追い詰められた感じがはつきりと窺えました。そんな大人たちに交じって、おびえを隠し切れずに母親にしがみついている子供たちの姿も見えました。ポーランドから逃れてきたユダヤ人たちでした。

今、リトアニアは世界中から最も注目されています。民族運動、ソ連からの独立、普通選挙と、大きく変わりつつある東欧諸国の動きとともに、新聞やテレビを通してリトアニアのニュースが私を惹きつけます。画面に映し出されたリトアニアの人々の目に、五十年前に日本領事館を取り巻いた人々の目が重なってくるのです。そしてリトアニアの街並みは、私たちが暮らした頃とあまり変わることなく残されているようです。しかし、それまでは日本ではほとんど話題にさえならなかった国でした。

私たち家族がリトアニアに向かったのは、一九三九（昭和十四）年十一月のことでした。夫のリトアニアへの赴任に同行していったのです。当時、夫の杉原千畝は外交官としてフィンランドの首都ヘルシンキの日本公使館にいました。そこに突然、リトアニアの首都カウナス（現在のビリニュス）への転勤命令が出されました。リトアニアがまだ独立した国家だった時のことです。身の回りのものを手早くまとめての、あわただしい引っ越しでした。

この直前に、ヒトラーの率いるドイツとソ連との間で独ソ不可侵条約が結ばれたわけです。しかし、これには秘密条約がついていました。その内容は、ドイツとソ連によるポーランドの分割とバ

ルト三国のソ連邦への併合がそれです。秘密条約の締結から十日もたたないうちに、ドイツ軍がポーランドに侵攻しました。第二次大戦の開始とともに、私たち家族のリトアニアでの生活が始まったのです。そして、翌年春にはソ連軍がリトアニアに入ってきました。といっても、激しい市街戦があったわけではありません。あったのかもしれませんが、私たちのところには届きませんでした。街角にソ連兵の姿が見かけられ、日を追うごとに、その姿が目立つようになりました。それは静かで、それだけに不気味な毎日でした。朝、目覚めるたびに、何ごともなければいいがという思いがよぎる日常だったのです。

あの夏の朝も、そうして始まりました。夫はユダヤ人たちの置かれている窮状をすぐに理解できたようでした。

「一九三九年九月、西ポーランドに侵攻したナチス・ドイツ軍がその占領した地区の住民に対して示した狂暴ぶりは、日に日にその熾烈さを増してゆき、そのうちでも、とり分け猶太(ユダヤ)人に対する残酷さは誠に目をそむけしむるものがあつた。それ故、仮令今日のところはまだその難を免れ得たとしても、明日のわが身はどうなるかは、誰ひとり予測できない状況にあつたので、三々五々相集うようになり、同年末頃からは、早くも北に向かって民族移動の様相すら帯びてきた。

この民族移動の大部分は途中言語に絶する困難を乗り越えて遠くバルチック海に臨むリトアニアの首都『カウナス』に流れ着いた。

当時、私はリトアニアのカウナス領事館に領事として在勤していた」（同手記より）

その後の約一カ月に及ぶ夫の行動を、当時の日本の外務省内では、「リトアニア事件」と呼ぶ人もいたようです。そして戦後になって、この「リトアニア事件」は誰からも忘れ去られていききました。私たち家族の中でも、あえて話題にすることはありませんでした。ことさらに忘れ去ろうとしたためではなく、ただ「あたりまえのことをしたただけだ」と夫も私も思っていたからです。

一九八九年四月、ニューヨークのユダヤ人団体の招きで長男と一緒にアメリカを訪れた折、ふとシカゴに住んでいるゼル夫人を訪ねてみようという気になりました。手紙のやりとりは何度かありましたが、会うのは初めてでした。電話をかけると、「是非いらしてください」と嬉しそうな答えが返ってきました。翌日、息子と別れて、私はシカゴに向かいました。

空港のゲートを抜けると、ひとりの女性が近づいてきます。彼女でした。身体の具合があまりおもわしくないと聞いていたので、まさか本人が迎えにきてくれるとは思っていなかったのです。驚いている私の手をとって、しっかりと握りしめました。車に乗り込んでからも、その手を離そうとはしません。ミシガン湖畔にある豪華なマンションの彼女の部屋に、私たちは手を握ったまま入っていました。

夕食のテーブルには、ご馳走がたくさん並びました。ひとり暮らしの彼女が、自分の手で、心をこめて作ってくれたものばかりでした。ミシガン湖に夕日が美しく映えていました。それから私たちは、夜の更けるのも忘れて語り合いました。私の夫の思い出、彼女とご主人とのアメリカでの苦

労話、そして子供たちのこと。彼女の話すドイツ語が、私に東欧での暮らしを思い起こさせました。

「今度いちど日本にも来てください。いいところですから」

帰りぎわ、彼女に思わずそう話しかけました。

「日本には、もう行きましたよ」

笑いながら答えた彼女の言葉に、私も笑い出しました。久しぶりのドイツ語の会話に、私は東欧にいた頃の友人に再会したような気持ちになっていたのです。

彼女は、五十年前、リトアニアの日本領事館を取り囲んだ人々の中のひとりでした。彼女の夫も、そして当時三歳だった愛娘も、その中にいました。リトアニアを離れた後、彼女の家族は日本を通じてアメリカに渡っていったのです。

ご主人は、私の夫が逝ったと同じ頃にガンで亡くなりました。最後まで、夫と私に「会いたい、日本に行きたい」と言い続けていたそうです。リトアニア事件は、この老夫妻の心の中で生き続けていたのです。

彼女たちばかりではありません。あの場にいた全ての人々の胸の中で生き続けていました。今も、その人たちから時折便りが届きます。外交官だった夫とともに、第二次大戦の最中に過ごした十年という歳月のたった一カ月の出来事が、私に多くの友人を残してくれました。

第二次世界大戦の頃のヨーロッパ

目次

序にかえて 5

第一章 逃れてきた人々

1. 肌寒い夏 16

2. 夫の苦悩 26

3. 覚悟のビザ発給 35

4. 運命の地 43

第二章 華やかなヨーロッパ

1. 出会い 48

2. 船出 53

3. 白夜の国 58

第三章 暗雲の広がり

1. モルダウ河の流れ 68
2. ヨーロッパを驚かせた小さな島 75
3. ベルリンの変貌 81

第四章 敗戦の予感

1. 笑いを忘れた王様 88
2. 煙幕下の逃走 96
3. 砲撃の中で 106
4. 敗れた国の外交官 114

第五章 囚われの身

1. 不安な日々 120
2. 果てしない旅 125
3. 希望 131

第六章 祖国の苦い土

1. 辞職勧告 140
2. 第二の人生 146
3. 遠く離れて 153

第七章 再会

1. 突然の電話 160
2. 黄金の丘 166
3. 世界中の友人たち 175

第八章 すり切れたビザ

〈資料〉

191

あとがき「終わらざるドラマ」

203

装　　丁／新田和子
カバー絵／能登文子
編集協力／高田企画

八岩まどか